光と形—古代美術とその技法にみる光の影響とはたらき—

Light and Form

—the influences and the functions of light in the ancient art and its techniques

神　田　毎　実

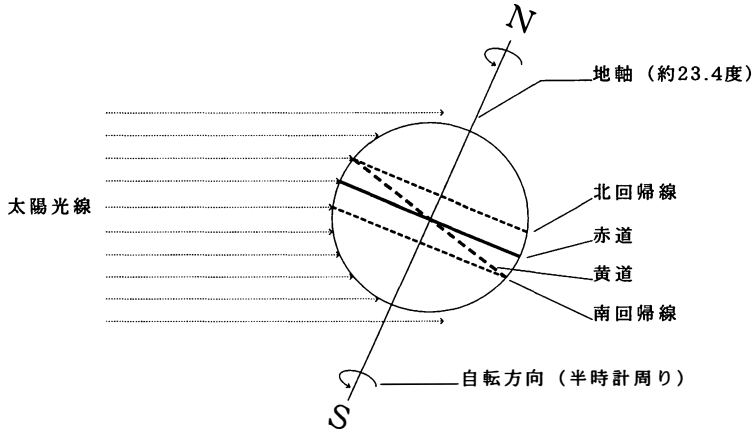
KANDA Tsunemi

I considered the relationships among climate, culture (or civilization) and the forms of art works. This is an introduction of my study on the influences and the functions of light in visual arts of ancient world.

The keywords of this paper are the following: climate (natural features), light, style, human being, etc.

1.

漆黒の宇宙空間に、青く光りながら浮かぶ太陽系第三惑星、地球。現時点で唯一つ、生命の存在を確認されるこのいびつな惑星は、約１年をかけて太陽の周りを一周する。放射性同位体による年代測定法によって、約46億年前に誕生したと推定されるこの大気と水に富んだ惑星の表面で、生命は生まれ、進化の道を歩み始めた。



太陽からの平均距離約１億4,960万km、水の惑星と呼ばれる地球にとって、これは絶妙の距離であるという。太陽の熱量と宇宙の温度との絶妙のバランス。光と闇との劇的なコントラスト。さらには、太陽と地球の質量、組成、地球の衛星である月の存在。その他、太陽系を構成する様々な要素とその関係、あるいはバランス。これら“地球を取り巻く環境”＝“太陽系の風土”が、のちに地球に生命を誕生させ、育み、人類を進化へと導く大きな基盤になっているといわれている。

太陽と地球の距離により調節された適度な熱量。地軸に与えられた約23.4度の傾きと、地球自身の自転と楕円軌道上の公転によって与えられる日射量の変化。宇宙という風土の中で、想像を超えた時間とともに、地球という複雑で新鮮な風土がまず生み出されていく。巨大な火の玉から水の惑星へと変化し、自らの羊水の中で生まれた生命を育む地球を、長大な時間を超えて眺めることが出来たなら、我々はその姿に宇宙の揺りかごを連想するかも知れない。

人類が類人猿から分岐したのは、500万～800万年前。さまざまな人類が登場し、そのうちのごく限られたものが、我々の祖先、つまりホモ・サピエンスになったといわれる。

オルドバイ峡谷（現：タンザニア）に代表されるアフリカ大地溝帯および南アフリカに生まれた人類の祖先は、進化を伴いながら、自ら先住地と似た環境を求めるように、長い時間をかけて世界中に散らばって行った。

＜現時点で確認されている、各大陸への人類の移動時期＞[1]

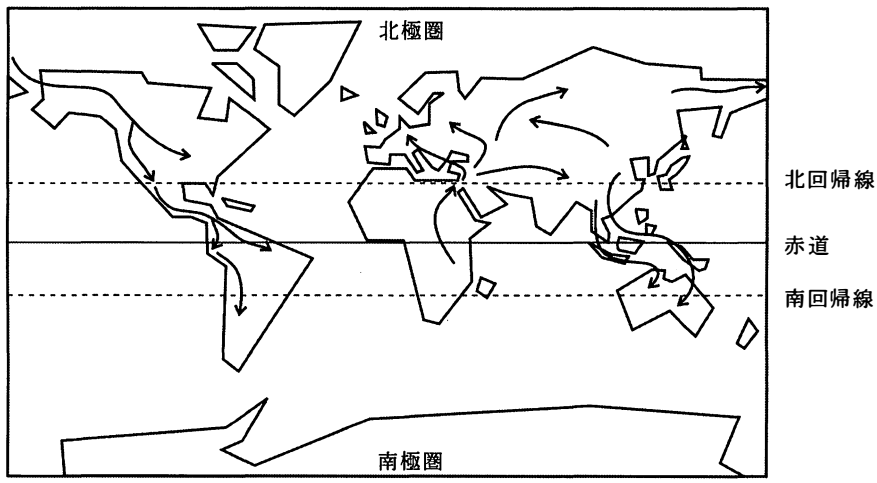
600万年前　西アフリカ・南アフリカ

100万年前　ユーラシア大陸の熱帯・亜熱帯地方

50万年前　ユーラシア大陸の温帯地方

5万年前　オーストラリア

2万5000年前　アメリカ大陸（この時点で現生人類に進化：現生人類＝Modern Man＝新人（ホモ・サピエンス）



人類を移動（拡散）に駆り立てたものがどのようなものであるのかは知らないが、砂漠、山脈、川、海などの存在が、人類の移動に大きく立ちはだかったことは想像に難くない。それらは、当然相当の時間、あるいは年月の消費を人類に強いたはずであり、同時に人類は、自然を含む様々な環境への対応、いわゆる適応を迫られたはずである。

人類の移動がどのようなスピードであったのか。どこで、どれほどの時間が費やされたのか。これらの質問に対する回答は、考古学的な物的証拠の積み上げに頼らざるを得ない。しかし、その詳しいデータの如何に関わらず、人類はその異なる環境ごとに対応を迫られたはずである。たとえば、地質が異なれば、鏃（やじり）の材料となる鉱物が異なる。鉱物が異なれば、強度が異なる。強度が異なれば、作り方が異なる。地質と鏃の関係を考えただけでも、これだけの違いが発生する。それを生活のすべての局面において展開し、体験的に情報を蓄積し、さらに経験として織り成すことを、人類はこの長い移動の過程で余儀なくされた。いや、かろうじて彼らを人類たらしめている小さな脳が、その複雑な仕事を余儀なくされた。結果的にはそのことが人類の脳の容量を増大させ、進化のスピードを加速させた。やがて人類はいかなる環境にでも適応できる能力を身に付けることとなる。

南半球西アフリカ、南アフリカから北へ赤道を越え、ユーラシア大陸の熱帯・亜熱帯地方、さらには同大陸の温帯地域へ、そして北アメリカ大陸を南に向かい、赤道を越えて南アメリカ大陸へ。600万年前に始まった人類の移動の軌跡を俯瞰するとき、その旅路は自身の生まれた環境への旅にも見える。数100万年に及ぶ定住と移動の中で、様々な環境に適応する術や、おそらく身体的機能を持つに至った人類が、何ゆえに更なる旅を続けたのか。人類としての生活環境を考えれば、その途中に温暖で豊かな風土はいくらでも存在したはずである。人類が最後に到達した南アメリカ大陸。南回帰線をはさむその地域に何が存在していたのか。人類を移動へと導いたものは、生まれ育った環境への憧れか、それに向けての強い衝動か、あるいは地球レベルでの大きな変動か、単なる偶然か。現時点において、はっきりとした理由は判明していない。しかし人類の移動には、そのような性格が鮮明に表れている。

2.

文明や文化という言葉の定義や解釈については、時代、あるいはそのことを考える人々の立場によって様々に変化して来た。文明と文化が区別されなかった時代もあった。文化をあくまでも精神的な活動の所産と考える時代もあった。あるいはそれと時代を同じくしながら、文化の範囲を人間の行動様式にまで広げて考える立場もあった。そして、それぞれにつねに新しい学問が生み出され、それによって、我々はその都度新鮮な視点を与えられてきた。

たとえば、今、特定の文明や文化について考えようとした時、土地や地域の地形、地質、気候、水質といった（自然）環境、いわゆる風土 － the natural features (of a region) ; climate － が、その

文明や文化の性格、特徴、様式を決定づける大きな要素、基盤として存在し、様々な影響を与えているであろうことは、おそらく多くの人が予感し、認めるところであると思う。しかし、要素、基盤としての風土が存在するだけでは、文明や文化が生まれ得るはずはない。そこには、その担い手としての人間が存在しなければならない。そして、その担い手である人間の具体的な生活や営みのイメージが伴って初めて、それらは色彩を帯び、輝きだす。では、風土と共にあって、文明や文化を生み出し、彩りを与える人間の営み、生活とはいかなるものであろうか。そのことを少し考えなければならない。

誤解を恐れずに述べれば、生活とはその規模の大小、多少に関わらず“経済”と見なすことが出来る。すなわち、物質の連続、連鎖である[2]。人間が生きる為に必要な物と物との連鎖、流通の連続体（態）である。しかし、物質だけで人の営みが生まれ得るか、あるいは説明できるかというと、単に生物としての生命を維持することのみを目的とする場合を除いては、一般的にそれは考えられない。そこには必然的に精神活動を予定しなければならない。喜怒哀楽に始まる感情、未知なる物に遭遇したときに覚える驚き、あるいは生存に対する欲求や欲望。その他あらゆる精神の活動が、そこには内在していると言うべきであろう。

人類は、発生当初からそのような精神活動を、別の言い方をすれば、脳の活動を連続的に行い、それを記憶に留め続け、自らの行動や活動を拡大し続けてきた。それは新天地への長い旅路の間にも絶え間なく続き、人類を新たな風土への適応に導いた。一代で終わるはずもないその旅路において、絶え間なく繰り広げられる脳の活動により、我々の祖先は適応能力を高め、自らの手で自らの生活環境を整える力を持つに至った。その成果として最も典型的なものが、家屋であり、農耕であり、治水灌漑であろう。もっとも、これはまだ随分と先のことなのであろうが。

我々の遠い祖先が、自身の手により、自身の生活の為に、より安定し、より快適で、よりリスクの少ない、結果的には、精神活動により大きな比重を置いた自身の環境を、“風土”という（自然）環境の中に構築しようとしたとき、それに必要な資材は、自身の行動範囲の中から調達するほかはなかった。繰り返される試行錯誤、そこには自ずと彼らの生活の舞台となる（自然）環境、すなわち風土を反映し、それに適合した、独自な“かたち”が生み出される。生活とは、物質と精神の連鎖によって織り成された色彩豊かな一枚の布のような物であろう。

生活を物質の連鎖と精神の連鎖による一枚の布にたとえるならば、これまで生活の集積と述べてきた文化や文明と呼ばれるものは、その布によって作られた衣服に例えることが出来るように思う。祭礼用のもの、外出用のもの、農作業用の簡素なもの、衣服には様々なものが存在する。それらは、その地の生活を反映させた“かたち”を与えられており、その“かたち”は、その用途によってある程度規定されている。そしてその向こうには、それを着て何らかの営みをする人間が存在し、その人間は基本的にその地の風土の上に立っている。ならば、風土とその“かたち”の間に、何らかの必然性を持った合理的な関係が見えては来ないか。ここに初めて、具体的な、しかも統一的な“かたち”、

生活の集合体（態）としての社会を反映した“スタイル”＝“様式”が登場する。

3.

文明や文化と言われるものは、我々や先人の所産である。それは、“風土”という基盤の上に展開された人間の生活の集積であり、その“かたち”である。ならば、その遺産である建築や石碑、彫刻や絵画、生活の道具といった文物は、その“姿”や“かたち”、“様式”に、人の生活と風土の間に存在する具体的な合理性、必然を映していると考えてよい。

（自然）環境とは複雑なものである。土地や地域の地形、地質、気候、水質その他の様々な風土の要素が複雑に絡み合ってそれらは形作られている。複雑に絡み合って形作られた（自然）環境は、個々に特徴を持っており、それらの特色は、我々の日常にあふれている。しかし、我々はそのことを、普段あまり意識しない。その理由の一つは、日常生活における我々の行動範囲である。我々は日常生活において、ごく限られた範囲の中でしか行動していない。地球レベルでそれを覗いたとき、緯度においても、経度においても、我々の行動範囲はほんのわずかな、狭いものにしか過ぎない。我々がそれをあらためて実感し、自身と自身の立つ環境を確認するのは、一般生活においては季節の変化を目にしたときであり、別の気候帯に移動したときである。

例えば今、性格の異なる二つの環境をイメージしたとしよう。一つは砂漠に代表される、“暑く乾いた”環境。一つは、海洋性の“湿潤で穏やかな”環境。そして、その環境が隣接しているとしよう。そして、我々はその“暑く乾いた”環境の真っ只中に生活しているとしよう。その我々が今、我々の生活の基盤である、“暑く乾いた”環境から、隣の“湿潤で穏やかな”環境の真っ只中にある目的地に向かって移動しなければならなくなった。その移動の中で我々は気がつくはずである。二つの環境がその外辺域で相互に混じり合い、極端な言い方をすれば、どちらでもない環境が誕生していることに。そこには、砂漠でもない、海洋でもない、あるいは逆に、砂漠でもあり得、海洋でもあり得る中間的な環境に成り立つ生活が存在している。

緩やかに、しかし密接に関係し、連なりながら、より大きな環境、風土が形成され、さらに大きな、地球という環境、風土が形成されていく。完全に独立した環境、風土など実は存在しないのだ。地球は風土の連続体（態）である。人類の生活も同様であろう。緩やかに、しかし密接に関係し、連なりながら、より大きな生活圏、文化圏、文明圏が形成され、最後にすべてを含む“地球”＝“マクロの風土”が形成されていく。

風土は変化し続けていく。人類は、風土と呼ばれる環境の中で、自らの文化的、あるいは精神的環境を創り出す。それは“新しい風土”の誕生であり、その誕生により連鎖の構造は変わる。それは連鎖の質的変化を意味し、同時に様式の変化を意味する。人類の営みは、確実に地球のすべての環境を

変えていく。完全に独立した生活や文化、文明など実は存在しないのだ。すべての生命活動、物質を含む風土。人類はそれらの連鎖の上に立っている。人間は、つねに風土と共にあった。そこには様々な精神の営みがあった。そして、人間の営みによって、新たな風土が創り出されるとき、あるいは、未知の環境下で新たな営みが起きるとき、そこには新しい“精神”の営みが生まれてくる。

4.

人間の営みは絶えず精神活動と共にある。その目的がどの方向を向いていようとも、必ず精神活動を伴っている。そして、その営みの中から生み出されてくる、経済、文字、音楽、美術、政治などの集積を、文化や文明として開花させている。ならば、文化や文明の要素である、経済、文字、音楽、美術、政治といった人間の営みの所産は、その“担い手の精神”、あるいはそれらの集積としての“時代の精神”を映し出ていると考えてよい。ゆえに、文化や文明は、その担い手である“人間の精神”、それらの集積としての“時代の精神”を映し出している。

人間の営みは、風土の上に繰り広げられる経済活動とみなすことができる。経済活動は、物質の連鎖、連続体[3]（態）であり、同時に精神の活動を内包する。すなわち、人間の営み＝生活は、“風土”と“物質”と“精神”と共にある。

人間は、風土と呼ばれる環境の中で、自らの文化的、あるいは精神的環境を創り出す。その環境は風土によって個別に異なり、織り成される人の営みは、個別の漠然とした方向性を帯びる。そして、個人、集団の別にかかわらず、その行動、あるいは営みの背後に、明瞭な“意思”や“意図”、“意識”の存在が認められたとき、それは“主観”を基盤とした方向性である“志向性”へとその質を変える。そこには、“個性”、“正体”、“独自性”＝“アイデンティティー”がはっきりと顕れている。

人間は、新しい環境を創り出してきた。自身の手により、自身の生活の為に、より安定し、より快適で、よりリスクの少ない、結果的には、より精神活動に大きな比重を置いた自身の環境を創り出してきた。それは、自身にとって、より好ましく、より大きな価値があり、より理想的であると感じられる方向への志向によって創り出されてきた“新たな風土”である。

新たな風土は、人間の志向によって創り出された。そこには人間の志向の特徴が現れている。それは、現代に生きる我々にとって、“良い”、“立派”、あるいは“麗しい”などと感じられるものへの志向であり、“美”、“美的”と認識されるものへの志向であると言うことができよう。

もっとも、“美”の概念の把握へと道がひらかれたのは近代においてであるから、この概念自体が古代においてどのように存在していたのかは定かではない。おそらくそれは、“感覚”や“感性”、“精神”といったものを刺激する、もっと広い意味を持つものとして捉えられていたのではないかと想像される。

人間の営みは精神の活動と共にある。そして、個々の、あるいは集団の志向は、その精神の示す方向と同一の方向を指し示す。ゆえに、それぞれの文化や文明、時代が示す独自の“かたち”＝“様式”は、その文化や文明、時代が目指した価値や価値観、さまざまな理想を内包し、映し出している。

人間はその存在の基盤とする（自然）環境＝風土の中に、自身の営みにより、新たな環境を創り出してきた。それは、自身の目的、その志向性によって創り出された精神活動を内包する“新たな風土”であった。ゆえに、文化や文明と呼ばれるもの、あるいはそれを形成する要素が我々に示す統一的な“かたち”、生活の集合体（態）としての社会を反映させた“スタイル”＝“様式”には、風土と人の営みの間に存在する“必然的な合理性”と“時代の精神”、すなわち、その文化や文明、その時代の目指した“価値”や“価値観”、さまざまな“理想”が、明瞭な“志向性”をともなって映し出されていると考えてよい。そしてそれは、我々が言うところの“美”、または“美意識”であり、“美の様式”であるに違いない。

人間はその発生以来、つねに風土と共にあった。そして、自身の精神活動と共に様々なものを生み出し、それらの集積を、文化や文明として開化させてきた。経済、文字、音楽、美術、政治といった人間の所産は、文化や文明、時代といわれるものが持つ独自の“かたち”を映しだしている。それは同時に、人間自身の志向を映し出している。

人間は、絶えず風土と共にあった。そしてその上で、絶えず精神の活動を続けてきた。その活動によって、新たな風土を創り出してきた。しかし、どのような時代においても、人間の営み＝生活は、“物質”と“精神”と“風土”と共にあった。ならば、精神活動を表出するもっとも典型的なものとして認識されている造形美術は、文化や文明、時代ごとに独自なその“様式”＝“かたち”に、自らの存立と共に存在する、“独自の（自然）環境”＝“風土”の影響を示していると考えてよい。

造形美術は視覚芸術である。平面、立体の如何を問わず、基本的にその存在の主張を、“視覚”に頼っている。すなわち、見えなければその用を成さない。逆に言えば、少なくとも様式として認められたもの、個別の様式名を与えられているものは、それらが生まれ、存在した地域や地形、建築等の特定の場所において、つまりはその空間の光によって、その文化や文明、あるいは時代が志向した、“価値”、“価値観”、さまざまな“理想”を、すなわち我々が言うところの“美”、“美意識”または“美の様式”を、必ず“視覚”を通して明瞭に知覚できることを前提として、形、フォルム、表面を与えられていたと考えてよい。

風土を構成する様々な要素。その中で直接的に造形美術に影響を与える要素。造形美術が視覚芸術であることを考えるとき、その存在を根底から支える“光”の存在が、無視できないものとして浮かび上がってくる。

註

(1) Microsoftエンカルタ 2002「人類の進化」から引用。

(2) スター・トレック　ディープスペース ナイン 第156話「予期せぬ亡命者」(Treachery, Faith and the Great River) から引用。フェレンギ人初の宇宙艦隊仕官ノーグは、物質連続体について以下のように説明している。

「それは実在します。…この宇宙には、数え切れないほどの世界が存在しています。それぞれで、ある物が余ってて、ある物は不足しています。物質連続体は全ての世界を…川のように流れ、必要なところを満たしていくんです。そして自分たちの船を上手に操り、川を進めば…船は望む物全てで満たされるようになっているんです。」

(3) 古代ギリシャの哲学者アリストテレスの物質論 (http://202.17.30.90/~matuzawa/history) から引用。